

福岡県西方沖地震で被災した玄界島の島づくりに関する調査

長崎大学工学部 学生会員○小川拓也 長崎大学工学部 フェロー 高橋和雄
長崎大学工学部 正 会 員 中村聖三

1. はじめに

平成 17 年 3 月 20 日に発生した福岡県西方沖地震により、震源に最も近かった玄界島では斜面地の住宅と宅地が甚大な被害を受けた。そこで、島民の意向を反映した復興計画をもとに、福岡市を事業主体とする小規模住宅地区改良を活用した事業が導入された。平成 20 年 3 月の市営住宅の完成を最後に避難生活は解消され、現在は島での生活が再開された¹⁾。新たな生活ではコミュニティの減少、少子高齢化、生活環境の変化など多くの問題を抱えていることが、平成 20 年 12 月行ったアンケート調査結果²⁾より明らかになり、島の再生のために島民を主体とする玄界島島づくり推進協議会が平成 21 年 1 月に設置された。そこで、本研究では、推進協議会設置から平成 21 年 11 月までの島づくり活動の実施を調査するとともに、今後の島づくりに必要なことを明らかにする。

2. 平成 20 年 12 月に行った島づくりに関するアンケート調査

平成 20 年 12 月に行ったアンケート調査で「玄界島島づくり推進協議会で議論して欲しい項目は何ですか」と聞いたところ、図-1 のような結果²⁾となった。

玄界島には観光客の受入れ施設として、震災前に旅館や物販所などがあったが、震災後はなくなった。その影響もあり、「観光客の受け入れ施設」が最も多くの選択を得て、観光振興に関して必要性を感じていることがわかる。他にも「島内での仕事の場の確保」と「少子高齢化対策」の項目も高い割合を示し、島離れや少子高齢化など将来的な人口減に強い危機感を抱いていることがわかる。また、多くの島民がコミュニティの減少を感じているにも関わらず、「島内のコミュニティの回復」の項目は最も低い結果となった。

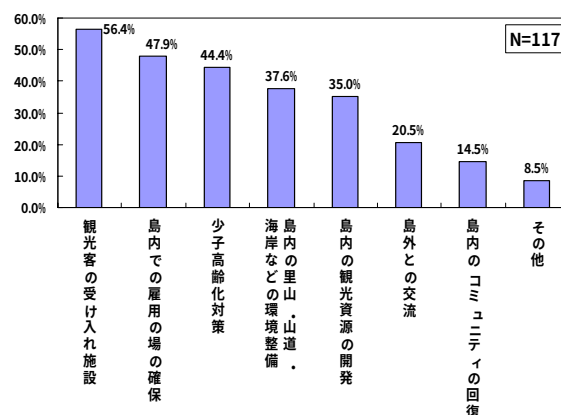


図-1 玄界島島づくり推進協議会で議論して欲しい項目

3. 玄界島島づくり推進協議会の島づくり活動に関するヒアリング調査

平成 21 年 1 月 7 日初会合で推進協議会の役員、組織名が決定した。役員は計 16 人、図-2 のように 7 団体から各 2 人、次世代を担う代表者を選出した（女性部からのみ 4 人選出、最年長者は 62 歳、最年少者は 25 歳）。

(1) ワークショップの開催 平成 21 年 3 月 20 日に島の産業振興を図るとともに、島民の憩いの場となる島づくりのきっかけづくりとなるワークショップを震災から 4 年目に推進協議会が主体となって島外の建築、まちづくり、ボランティア、学生を招いて実行した。ワークショップは、「玄界島を回って何を感じたか」、「玄界島の魅力は何か」、「振興方策の提案」をテーマに掲げ行われた³⁾。このときに出された意見を 3 項目に分けて表-1 にまとめた。

(2) 現在までの活動 玄界島島づくり推進協議会が発足から現在までに行った主な島づくり活動を 3 項目に分けて表-2 に示した。この活動の中で、特に直売所の開設を島づくり活動の重点活動として力を注いだ。直売所では特産品（わかめ、さざえ、蜂蜜）の販売、クルージング（1 人 500 円）、レンタ



図-2 玄界島島づくり推進協議会の組織図

サイクル (1 日 100 円), 鯨飯弁当の販売を行った。直売所を運営するために島民に販売希望者を募集したが, 申し出は少なかった。そのため, 推進協議会の役員が交代で運営者としてボランティアで活動したが, 通年で続けることは難しく, 7 月から 9 月までの期間限定といった形になった。また, 来客者数が見込みよりも少なかったため, 収支がとんとんであり, PR 活動に問題を残した。表-1 と表-2 を比較すると, このワークショップで提案された多くの振興方策が採用されていることがわかる。参加者の多くがまちづくりや建築などに携わっており, 阪神・淡路大震災の計画づくりの事例など専門家の意見を交えながら意見交換を行うことができたため, 提案された振興方策に説得力があった。推進協議会の役員は島民で編成されており, 島づくり活動を行うことは初めてである。そのため, 島外からの来客者の提案は非常に参考になっていると思われる。

この他に, 「動く震災博物館」を現在計画中である。これは, 来客者の方々から「震災の爪あとがない」といった意見が参考となっており, 島の 10 箇所に被災直後の写真を使った陶板を設置し, ガイドが被災当時の話をしながら案内するものである。

4. 今後の島づくり

これまでの活動を基に玄界島の島づくりのコンセプトをまとめると, 図-3 のようになる。このうち, 島の活性化は主として島外からの観光客の受け入れであるが, 宿泊施設と飲食店については未だ目途が立っていない。復旧した漁村センターを当面活用するとともに旧中学校跡地の活用の方策を取り組む必要がある。復興した島の姿を見てもらうためには災害遺構の保存と掘り起しが不十分である。自然とのふれあいは, 自然豊かな海と山の両方を楽しむことができる島であることをアピールする PR 活動を取り組む必要がある。また, 現在は推進協議会の役員がすべて企画から運営にあたっているが, 負担が大きく長続きするかどうか不安が残る。活動している役員が負担に感じたら, 観光客は楽しくない。島民の参加を増すとともに, 島外の人的資源の活用も必要である。長崎大学も玄界島のホームページの作成, 災害資料の収集, 島外との交流について協力可能で実施中である。

5. まとめ

玄界島の島づくりは島民を主体として着実に実行されつつある。島づくりを島外の人に知ってもらうための情報発信, 島づくりの担い手の養成などを進めることが必要である。

参考文献

- 1) 福岡市: 玄界島震災復興記録誌, pp.37-80, 2008.3
- 2) 山下龍志, 高橋和雄, 中村聖三: 福岡県西方沖地震で被災した玄界島住民の帰島後の復興評価と島づくりに関する調査, 土木学会第 64 回年次学術講演会概要集第 4 部門, pp.219-220, 2009.9
- 3) 玄界島島づくり推進協議会: まちづくり企画支援事業実施報告書, pp.5-15, 2009.3

表-1 ワークショップの内容

項目	玄界島の魅力	振興方策の提案
島の活性化	・子供が元気 ・温かい人が多い ・人間関係の濃さ	・スポーツイベント開催 ・特産品づくり ・食堂づくり
復興した島のアピール	・震災で関心が高まっている ・近代化が進んでいる	・記念館や博物館づくり ・玄界島カレンダーなどで PR 活動 ・避難生活でお世話になった地域との交流
自然とのふれあい	・豊かな自然が残っている ・車が少なく静かである ・素朴でおいしい海の幸	・魚料理・釣体験 ・ハイキング ・海辺でバーベキュー

表-2 玄界島島づくり推進協議会活動内容

項目	実現させた活動	計画中の活動
島の活性化	1. 直売所の開設(7~9月) 2. 特産品の開発 3. ワークショップの開催	1. スポーツイベントの開催 2. 介護施設の建設
復興した島のアピール	1. 防災どんたくに参加 2. 防災学習の受け入れ 3. 全国街づくり会議に参加	1. 動く震災博物館 2. 陶板の設置(防災学習に使う) 3. 被災地交流会へ参加
自然とのふれあい	1. 散策コースの整備 2. 周回道路の整備 3. クルージング 4. レンタサイクル	

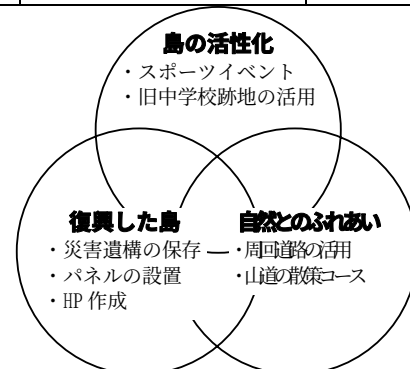


図-3 島づくりのコンセプト